

初期パーリ佛典に見える「疑」の語について

桜 部 建

この小論は、昭和四十年年度真宗同学会において発表し、その概要が大谷学報第54巻第4号59—60ページに載せられたのを、補訂したものである。

一

初期パーリ佛典の中で「疑」の意味に用いられている語は種々である。

- (1) *vicikiccha* はもろもろのテキストを通じて頻出する。PTSの辞典 (s. v. *vicikicchati*) では接頭字 *vi-* を否定の意にとり 'dis-reflection' と解している。おそらへブッダモーサの *vigata cīkiccha ti vicikicchā* など、*vicikicchā* (cf. Sn 471) に拠っているのであろう。しかしその *cīkiccha* (= *tīkicchā*) は「省慮」よりもむしろ「治癒」の意 (cf. Sn 927, s. i. 222; 水野『心識論』五八九ページ) に取るべきであろうし、その積自体 *etymology* として拠るべきほどのものではあるまい。多分この語は、原義「識別しようと欲する」(*vi/cit* の *desiderative*) から、「ちまたちまたに考えようとする」「思い惑う」「疑惑する」の意となったものと考えてよいであろう。

(2) 語根 $\sqrt{\text{sañk}}$ は「案じ懼れる」「懸念する」「疑懼する」の意が強い。その $\sqrt{\text{sañk}}$ kati は bhayati (怖れる)

と並べて用いられる (S i 111)。名詞 *sañka* は現われること極めて稀 (J vi 158 など) である。〔合成語 *sañkhasara* が「訝しむ」あるいは「訝しむをいたさながらの」の意で形容詞として用いられている例はかなり広く見出せる (Vin ii 236; S iv 180=A ii 239, iv 128, etc.; S i 49=Dh 312=Thag 277; S i 66) が、この語を「マタコーサの言へ (DhA iii 485, PugGA 207) $\sqrt{\text{sañk}}$ *sañka* ν *sara* とからの合成語と見るのは将やうく正しくなく (PTS Dic, s. v. *sañkhasara*)。Mvy 9140 に見える *sañkhasvara* なる語形がこの語と関連していることは疑いなくからうである (Edgerton Dic, s. v. *śaṅkhasvara-samācāra*)。接頭字の $\sqrt{\text{sañk}}$ *asañkati* (Ud 44, M iii 7, J iv 386, etc.) & *parisañkati* (J iii 210, etc.) も時々見られる。これらは共に「怪しむ」「疑いをかける」というニュアンスが強い。名詞 *asañka* は多く合成語の中に見える (Dhedasankin, Sn 255; *sasañka*, Thig 343; S iv 175; *niraśaṅka*, J i 264)。*parisañka* (Vin iv 314; D iii 218, etc.) *parisañkita* (Vin ii 243, A iii 128, etc.) なども現われるが用例はそれほど多くない。時に *ussañkin* という形も「疑懼する」という意の形容詞として用いられている (Ud 19, Vin i 347, etc.)。

(3) *kañkha* は奇妙な語である。語根 $\sqrt{\text{kañk}}$ は一般には「望む」「欲する」「……であらうと期待する」の意に用いられ、「疑う」の意味で使われることは無さうである。ところが佛典においては、稀に「欲する」の意に用いられることもあるが、「疑う」の意味で用いられることが断然多い。いま、初期のパーリ佛典の中でも、*kañkha* はかなり頻出するが、ほとんどの場合「疑」の意であって「欲求」「期待」の意味に用いられる場合は僅か(例えば *ya kaci kañkhā abhinandanā vā...so ham akañkho apiho anupayo*, S i 181. SA 457)の *kañkha* を *tanhā* と解する)のしか過ぎなく。その $\sqrt{\text{kañk}}$ *kalam* *kañkhati* (死)時の至るを待つ)と $\sqrt{\text{kañk}}$ *o*ムは韻文のテキストの中に何度か現われる (It p. 69; Thag 12, 1218; Sn 516; S i 65, 187)。また接頭字 *pañ-* が附けられる「望む」「欲求する」の意である (*pañ-* *kañkhati*, S i 227; *pañkañkhā*, A ii 185; *pañkañkhin*, M i 121; *pañkañkha*, Sn p. 140(=icchitabba, Sna); A iv 17, S i

88, v 225; pāṭikākhin, D i 4, M ii 33, etc.) ㄱ' abhi- が附いた場合も同様である (abhiṅkākhati, Sn 510)。kankha の語が「疑」の義をもつようになるのは、あるには「はつきり知っていないことをはつきり知ろうと」欲する」という意から出たのかも知れない (cf. pucchami kankhī akaṅkhiṃ para-vediyesu, D ii 241; kankhī veckicchi agaman pañhe pucchitun abhiṅkhamāno, Sn 510) と思われるけれども、なお審かでない。

(4) vimati は、名詞としてのこの語形以外には、稀に過去受動分詞 vimata が見られるのみで、動詞形 vimānhati は全く現われないようである。したがって vimati は、vi/man より生じた名詞形と見るよりも、むしろ名詞 mati に接頭字 vi- を附したものと見るべく、その場合も「mati (=mind, opinion, understanding) を離れた」意と解するよりも「種々な mati ある」の意と解すべきであり、さまざまに思い惑って考えが一つに決まらぬ状態を vi-mati というのである。

(5) kathamkatha は文字通りには、'saying how' であるから、思い迷って「どうしようか」「どうなんだろうか」と言うのみで明確に事を判断できぬ状態を意味すること明らかである。

(6) saṃsaya の用例は、わずかに chinnsaṃsaya (Sn 1112, A ii 24) ʼ asaṃsaya (M i 386) などの合成語として現われるほかはきわめて稀 (Sn 682 に見るくらい) である。

二

このように色々の語が用いられ、それらはそれぞれのニュアンスをもっているわけであるが、実際の用例の上では、(2)を除けば他は、各語のニュアンスによって用いられる方が異っているというよりも、おのおのがあまり殊別無しにいずれもほとんど同義語として通用されているといつてよく、それらの中のいずれか二語を並べ挙げている場合も沢山あるし、二つの語を結合して合成語としてしている場合もあるのである。

その例の最も多うのは(1)と(3)とで、ついで(2)と(4)とで、ついで(5)と(6)とで、ついで(7)と(8)とである。各語 vicikiccha と kanhka とが並挙される (S iv 399, A i 189 など) 動詞 vicikicchati と kanhhati とが並挙される (直接法現在形で D iii 217, 238; M ii 135; S ii 17, 50, iii 99, 175; Sn p. 107 など。願語法で S v 225, 不定体で S iv 350, A i 189 など。過去受動分詞形で S iii 99, 等々) ほか vicikicchin と kanhin (M i 18, A ii 174 など) veckicchin と kanhin (Sn 510) など並挙せられたり、それそれの不定形 nibbickiccha と nikkankhā とが並挙せられたり (S ii 84) たり、一語が合成語とされ (kanhhi-veckicchi-sando-sa, M i 18) たりする例を随所に見出すことが出来る。

(4) vimati など(3) kanhka と必ず伴つて現われ (kanhā vā vimati vā, D i 105, ii 154, iii 116; M iii 271; A ii 79; S iv 327, v 161, etc.; siyā kanhā siyā vimati, S iii 327) 一語の例外も無い。

(1)と(2)も並挙せられることが多う (tinnavicikiccho vigatatakamkatho, D i 110 = M i 380 = A iv 210 = Ud 49; D ii 224; M i 235, etc.; tinnavicikiccho viharati akathamkathī kusalesu dhammesu, D iii 49, M iii 35) 一語が合成語を成つてゐる例も多う (vicikicchakathamkathāsalla, D ii 283; A iii 292)。(3)と(4)の並挙 (tinā m'ettha kanhā vigatā kamkathā, D ii 276) や(5)の否定と(6)の否定との対応 (M i 386) も見出せる。

このような多くの例から、(1)(3)(4)(5)(6)がほとんどシノニマスに用いられてゐることは明らかである。もつとも時々は kanhka からつて vicikiccha が生ずる (kanhato uppajati vicikiccha, M i 260) とさう言う方もあるが、一方は kanhhanīye ihane vicikiccha upanna (A i 189, S iv 360) などさういふのであるから、その一例に重要な意味は認められまい。シノニマスに用ゐられてゐるこれらの語語に通ずる語義「疑」は「怪しむ」「うたぐる」「まことと思はぬ」「信ぜぬ」の意であり、もつと「惑う」「まちう」「決することができない」「考えが一つに定まらぬ」の意であることは、上述の各語の原義からも知られる。のちの論藏の釈義 (Dus p. 85, 183; Vibh p. 255, 364, etc.) の中で dvejhaka (一様じきやべん) へ dvehāpatha (一略じきやべん) へ anekamsagāha (一語の立場を二の立場がびきりな) などと解や

れていることから知られ、北伝阿毘達磨・大乘論書の中の解釈（水野『心識論』五八八―五九二ページ参照）やチベット訳語（e. g. kāṃkṣā = som hi, vimati = yid gnis）などからも知られる。

ただ、煩惱法としてのあるいは心所法としての「疑」は、常に vicikicchā であって、けっしてそれ以外の語は用いられない。

それは有身見 (sakkāyaditthi) ・戒禁取 (sīlabbataparamāsa) と共に三結 (saṃyojanāni) の一であり (M i 9, D iii 216, etc.)、有身見・戒禁取・欲貪 (kāmarāga もるころは kāmachanda) ・瞋 (vyāpāda) と共に五下分結 (pañc'orambhāgiyāni saṃyojanāni) の一であり (M i 432, D iii 234) 欲貪 (kāmacchanda) ・瞋 (vyāpāda) ・憍沈睡眠 (thina-middha) ・掉挙悪作 (uddhacca-kukkucca) と共に五支 (aṅgāni, S i 99, M i 294) もるころは五蓋 (nivaraṇāni, 類出) の一であり、欲貪 (kāmarāga) ・瞋 (patigha) ・見 (ditthi) ・慢 (māna) ・有貪 (bhavarāga) ・無明 (avijjā) と共に七隨眠 (anusayā, D iii 254) の一であり、あるころは七結 (saṃyojanāni) の一である（この場合は第一項は愛 annuṇaya, D iii 254 であり、または貪 rāga, M i 100 である）。あるころはまた十一の心の隨煩惱 (cittassa upakkilesā, M iii 156-61) の一とされることもある。

III

疑の対象となるのは、時には「如来」(D iii 116, S v 161) であり、時には如来の「正法」(A ii 174) であり、時には「師 (佛) と法と学処」(D iii 238, M i 101) であり、時には「佛・法・僧・〔八正〕道 (maggā) ・〔中〕道 (paṭipadā)」(D ii 154, A ii 79) である。あるころはまた「過去世・未来世・現在世」が (D iii 217) 、「また時には隱馬藏・広長舌の「二つの大人相」が (D i 106, M ii 135, Sn p. 107) 疑惑の対象となる。「一切の善法」に対して疑惑がもたれる (M i 386, iii 35; D iii 49) こともある。総じて「疑いを生ずべき種々様々な法」(anekavhiṭṭā kanhāṭṭāniyā dha-

mmā, A iii 361, v 16) があるのである。

そつした疑は「越え渡 (tarati, Sn 540; vitarati, Ud 1, 2)」「断た (vihanati, Aiii 248)」「断ぜ (vinayati, Thag 3, 131; Sn 559)」「断る (paṭvinodeti, A iv 152, v 16)」「断る (chijjati, Thag 75, Sn 87)」「断る」ものである。

法を知り (pañānati) 法を知る (vedeti) ことによつて疑は消え去る (vappayati) し (Ud 1, 2) 義 (attha) を知る (aññati) ことによつて (Sn 58) あるは理を説き明かす (vyākharoti, Sn 1025) ことによつて疑は制せ (vinayati) される。正慧 (sammappaññā) によつて見る者は疑を捨てる (A i 260)。疑が断せられる時は覚知 (buddhi) が増す (Thag 75)。疑無き者は不動 (aneja, Sn 87, 477) であり、心の荒蕪が無 (akhiṇa, Sn 477)。疑を棄てて人は心を浄める (cittam parisodheti, D iii 49)。

「疑 (kaṅkhati, vicikicchati)」の *antonym* は saddahati (Si ii 84), adhimuccati, sampasīdati (D i 106, A iii 248, Sn p. 107, etc.) などであり、いずれも「信する」と訳される語であるが、「疑」の内容が右に述べたとききものであるから、それに対する「信」の内容も、正しい覚知を得ることによつてあれこれと思ひ惑うことのなくなった状態、心の動揺やおそれがなくなりものごとを確信をもつて了解するに至った状態、にほかならないと考えられる。このように考えることはまた「信解」「勝解」などと漢訳されている adhimuccati; adhimutti, adhimokkha の用例や語義の検討からも支証を得られると思うけれども、それについては別の機会を得たい。